

「危機」の本質

1972年に、ローマクラブという世界的なシンクタンクが『成長の限界』という報告書を発表しました。

その中では、人類の将来に対する次のような警告が語られています。

世界人口、工業化、汚染、食糧生産、資源の消耗などの点で、現在のような成長が不変のまま続けば、今後、百年の間に地球上での成長は、限界に達するであろう。その結果、最も起こる見込みの強い結末は、人口と工業力の、突然の、制御不可能な減退であろう。

それから20年後の1992年、この報告書を作成したマサチューセッツ工科大学のメドウズ教授は、『限界を超えて』という新たな報告書を発表し、ふたたび、同じ警告を発しています。

人間が必要資源を消費し、汚染物質を産出する速度は、すでに持続可能な速度を超えてしまった。物質およびエネルギーのフローを大幅に削減しないかぎり、食糧生産量、エネルギー消費量、工業生産量は、何十年か後には、もはや制御できないような形で減少するだろう。

この二つの報告書を読むとき、我々は、数十年後に迫った地球規模の危機に対して、社会システムの変革が、少しも進んでいないことを知ります。

そして、この『限界を超えて』が発表されてから、さらに十年以上の歳月が流れたことを思い起こすとき、我々は、人類が直面する危機の本質が、何であるかを知ります。

その危機の本質は、

「変革が進まない」ことではありません。

「変革が進まないことを、危機と感じない」

その我々の意識にこそ、あるのです。